あの空地

春春秋秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの空地

【Ｎコード】
Ｎ７５１９Ｏ

【作者名】
春春秋秋

【あらすじ】
少女が迷っていたので案内をすることに。
その少女の正体は？

いつもは通り過ぎる会社のかえり道、今日は足をとめてみた。
小さな少女がぽつんとたっている。年のころは5～6歳だろうか。
何かこまったことがあるのか、あたりをきょろきょろと見渡しては、
大人に声をかけようとしては躊躇う。大人たちは少女がまるで見え
ないかのように通り過ぎるのだ。そんな光景が妙に気になった。

あーあ、今の世の中子供に声をかけるのは勇気がいるんだよな。不
審者扱いを恐れつつ、僕は少女のほうへとむかっていった。

「なにか、困ったことがあったのかい？」
少女はこちらに顔を向けるとただ僕をみていた。引っ込み思案な子
なのかな？
「こわがらなくてもいいんだよ。何か困ったことがあるならいって
ごらん」
少女は少し顔を和らげた。
「ありがとう。道にまよったのです」
「お兄さんは生まれた時からずっとこの町にすんでるんだ。どこに
だって案内できるよ。住所はわかる？」
「うん、えとね。住所は……。お母さんがずっとまってるの」
なんだ、近所じゃないか。ここから、そう遠くないな。
「ついておいで」

僕は少女を案内するがてら、今回の顛末をきいていた。母親に頼ま
れてお使いにでたはいいものの道に迷ったこと。どうしたらいいの
かずーーっと迷っていたら、僕が話しかけてきたそうだ。

「ここかな？」

その住所にはちょっと今の流行とはあわないけど、白い新築の家が建っていた。表札には「佐藤」と書かれている。
「うん、ありがとう、亮君」
少女はチャイムをならすとお母さんらしき人が出てきた。
少女は走り出すとお母さんに抱きつく。
「ごめんね。お母さん。待たせたね」
ちょっと苦労しているのかこの子の母親にしては老けている気がした。母親は泣き、少女も泣いていた。
僕は少しオーバーな家族だなとおもいながら邪魔をしないように、家へとかえった。

今日はいいことをしたと思いながら部屋でくつろいでいると、妻の声が聞こえた。
「ごはんできたよ。」
いつものようにテレビをつけながら、雑談に華を咲かせる。
妻とは小学校のころからの付き合いで腐れ縁のまま結婚してしまった。
「ねぇ今日はね。母の命日なの。覚えてる？」
僕はきまづくなった。妻の母は妻が小さい時に焼身自殺しているのだ。妻が住んでいる家もその時焼けてなくなってしまった。
「私が、お使いにいっている間母親は死んでしまったのよね。もう少し早く私が早く帰っていたら母を助けることができたかもしれないのに。」
「仕方ないよ。自分を責めることはない」
「ううん、違うの今年はなぜか悲しくないの。なぜかしらね？あの家があった所にも行ってみたけど、前ほど悲しくないのよね」

あの家の跡地は今でも焼けた後、空地になっている。
あれ？
「ごめん、ちょっとでかけてくる」

僕は少女を案内したあの家まで走った。
そこには、

空地があった。

妻の旧姓は「佐藤」だったな……。

僕は、花を一輪摘むと空地にそっとおき、手をあわせるのだった。

どこからか、「ありがとう」という声が聞こえたような気がした。

（後書き）

感想ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7519o/

あの空地

2010年11月9日05時05分発行